

国際交流委員会報告

第 18 回国際家政学会プレコンGRES
—日本および中国で開催された会議報告—

(社) 日本家政学会 国際交流委員会

日本でのプレコンGRES
“Gender Equity and Family Living”

概 要

(社) 日本家政学会は、1996 年 7 月 17 日 (水)~20 日 (日) 迄、国立婦人教育会館において、“Gender Equity and Family Living”をテーマに、タイ国バンコクで開催された第 18 回 IFHE 世界大会 (7 月 21 日~26 日) のプレコンGRESを主催した。概要は次の通りであった。

1. 組織：1995 年度国際交流委員会内にプレコンGRES企画担当 (伊藤セツ、大竹美登利、大谷陽子、松岡明子) をおき、助成金申請時に組織委員会を設置 (野口 駿、伊藤、大竹、澤井セイ子、荒井紀子、堀内かおる、石川尚子) し、1996 年度、最終的に実行委員会が次のように再編された (再出は、姓のみ記入)。

顧問：岩崎芳枝、大野静枝、野口、江沢郁子、阿部幸子、中島利誠／実行委員長；伊藤／コンタクト・パーソン；大竹／渉外；澤井、荒井／会計；松岡、沖田富美子、堀内／庶務；松山容子、御船美智子、石川、鷺見美智子、天野寛子／編集；奥野和子、長津美代子、黒田淑子／協力員；工藤由紀子、井元りえ、黒川衣代、室 雅子／ボランティア；松葉口玲子、斎藤悦子、伊藤 純、石川周子、柿野成美、片田江綾子、林 葉子、谷口和加子、本間奈緒子、下開千春。

以上の他、国立婦人教育会館ボランティア 2 名、東松山市、東松山「緑風ネットワーク 21」(会長 石川邦夫) 他東松山女性・市民団体員約 80 名の協力があった。

2. 会計：主な収入源：日本家政学会予算、日本からの参加者参加費、IFHE 日本支部から、World Home Economics Day 寄付、その他寄付 (他に、東松山市、及び市民団体の助成金支出、寄付等を考慮に入れる必要がある)。主な支出：外国人招待者 6 名の招待費、同時通訳料、会館宿泊料、資料作成費等。

3. 参加費：外国から来日する外国人は無料、日本

人は 2 万円 (日本在住外国人も同じ)。

4. 参加者：外国からの参加者は 16 名 (国籍は、韓国 2, フィリピン, インド, オーストラリア 3, ケニア, タンザニア, ナイジェリア, カナダ, 米国 2, 英国, スコットランド, ドイツ)。日本からの家政学会関係参加者は 55 名 (1 名はミャンマーからの留学生, 役員, 協力員, ボランティアを含む)。東松山市の市民ボランティア団体から 8 名の傍聴者。

5. プログラム：7/17 午後受付, ティ・セレモニー*, 国立婦人教育会館ツアー**, 歓迎パーティー* (開会 伊藤, 司会 澤井, 挨拶 大野)

7/18 開会式 司会 澤井, 挨拶 大野, 伊藤

基調報告 座長 澤井セイ子

Francille M. Firebaugh (U.S.A), 袖井孝子

1. 家族資源 座長 工藤由起子

Young-Jo Yoo (韓国), 本村 汎

2. 環境と家族 (1) 座長 上野勝代

Alfred C. Luanda (タンザニア), 外山知徳

3. ジェンダー・エクイティ (1) 座長 袖井孝子

Hiltraud Schmidt-Waldherr (独), 酒井はるみ

7/19 環境と家族 (続) 座長 在塚礼子

Pamele Kaye Williams (豪), 川崎裕子

ジェンダー・エクイティ (続) 座長 在塚礼子

Claus Jehne (豪), 大竹美登利

4. 教育とジェンダー 座長 中島利誠

Amita Verma (インド), 伊志嶺美津子

Maryanne Doherty-Poirier (カナダ)

荒井紀子, 福留美奈子

5. 平等, 開発, 平和 座長 津田美穂子

Cecilia A. Florencio (フィリピン)

伊藤セツ, Nwakego Molokwu (ナイジェリア)

7/20 サイト・スィーイング*, お別れの夕べ*

(*「緑風ネットワーク 21」がスポンサー, 他に昼食, 休憩時間の茶菓・労力の提供を受けた。**) 国立婦人教育会館ボランティア担当)。

(昭和女子大学 伊藤セツ)

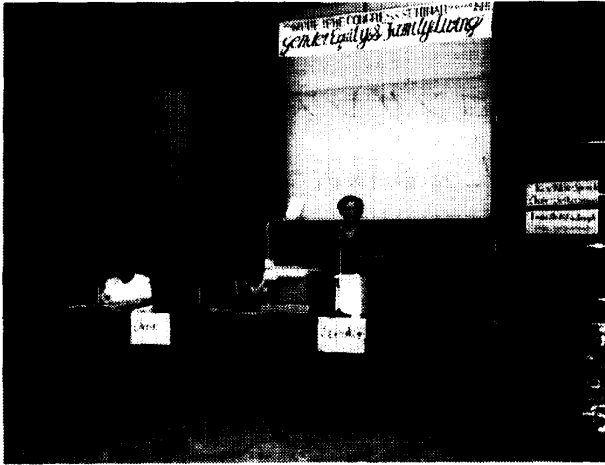


写真1. 会議風景

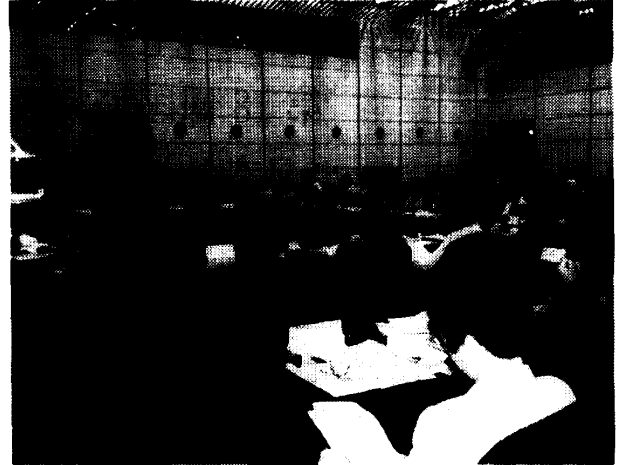


写真2. 会議風景

基調講演

最初に、コーネル大学のファイアバウ氏が「家族内のジェンダー・エクイティ」を報告した。家族のジェンダー・エクイティとは伝統的に担ってきた性別役割に対し、男女が責任を分担する、新たに役割を担い合う機会を拡充することである。役割の指標は家事の分担、意思決定の方法、資源の管理権であるが、家事の分担が中心課題となる。その分担は、公平か不公平か、どの仕事をするか、仕事を個人的にコントロールできるか、仕事の時間帯はどうかにより、異なる。これらには職種や賃金等の就労状況、結婚年齢等のライフコースの出来事、子どもの有無、女性の教育レベル、男女各々の性別役割に対する態度や意識が影響する。また、国を越えた視点からみて、都市化していない、宗教の拘束が強い、身体的な能力を重視する、女性の多くが家庭にいる、女性の教育レベルが低いといった国では、性別役割が明らかに存在する。さらに、日米を比較すると、平等とは、日本では一家の長が考慮し、米国では個人が自立し権利を主張すること、役割は文化的な違いにより影響され、日本が女性＝世話、男性＝職業、米国では女性＝世話と職業、男性＝職業と少しの世話となっている。日本の女性の権限、地位、自立は先進国では最も低い、米国の事例から女性の収入が影響することは明らかであるとしている。

次に、お茶の水女子大学の袖井孝子氏は「ジェンダー・エクイティ：二重役割負担の緩和の方策」を報告した。現在、日本の女性の役割が家事・育児・稼得、男性のそれが稼得となっているが、これは社会における性別役割分担、父系直系家族制度の理念、周囲からの役割期待、女性自身の女性役割への同一化によるも

のである。これらが女性の職場進出においては家族の役割の遂行と夫の税控除に有利なM字型をとらせ、家庭においても儒教の強い影響により伝統的性別役割を支持し高齢者の介護も女性が担うという現状をもたらしている。エクイティがイクオリティよりも有効なコンセプトとされるのは平等な機会のみならず環境の平等という公平＝Justice が加わるからである。家族の中のエクイティは家族における自己実現と生活の満足感を促進する。男女間の制度的な平等であるイクオリティは教育、職業、政治のような公的領域では有効であるが、不平等な環境をふまえた公平の感情を含むエクイティは家族という私的領域においては適切なコンセプトである。そこで、家族内でのジェンダー・エクイティの実現は女性の過剰役割の緩和によりもたらされるものである。そのための方策として、1) 不払い労働の評価＝男女間の支払い労働と不払い労働の公平な配分法、2) 社会の分担＝共生社会実現のための社会経済的な制度の確立、3) 家庭の分担＝職業労働時間の短縮と性別役割に対する、特に女性の意識の変革、4) 子どもの教育＝ジェンダー・エクイティが個人の態度の変化により可能になるとし、子どもが小さい時からの学校や家庭やマスメディア等の公的、意図的、私的、無意図的な社会化の過程の重要性の認識が必要であるとした。

両氏によるジェンダー・エクイティの分析は参加者に明確な共通理解を与えるものであった。

(秋田大学 澤井セイ子)

セッション1 家族資源

第1セッションにおいては、本村 汎大阪市立大学

教授と韓国家政学会会長・慶熙大学校家政大学学長、劉 永珠教授による報告がなされた。

劉教授は、1962 年 Otto によって始められた「健全な家族」に関する一連の研究成果を基に、韓国における実証的研究の成果を発表。氏は夫婦間の平等と家族成員の個の確立を「健全な家族」の要件としてあげる。これについて、都市部に住む既婚男女へのアンケート調査を行い、男性より女性の方が、世代間比較では 30 代・40 代よりも 50 代・60 代のほうが男女間における不平等感が強いこと、また、夫婦間の平等感と「健全な家族」との間には関連性があり、平等であるという認識度が高い夫婦ほどその関係は「健全」であるという結果を得ている。このことから、現代韓国において伝統的家父長制に基づく夫優位の傾向はまだ残されているが、若い世代を中心に夫婦平等の規範が育ってきている。今後更にジェンダー・エクイティを実現し、韓国の男女が健全な家族関係を築くためには男性に対する教育を通じて、男性の意識を変革していくことが必要であるとしている。

次に、本村教授からは日本社会にみられる家族病理との関連で、日本の結婚・家族の変化とその問題点についての報告があった。日本の結婚・家族の変化を、歴史的な視点から戦前の家父長的・大家族から戦後の個人的・民主的な夫婦家族への変化という大きな流れの中で捉えた上で、現在社会においても、家族主義に代表されるような家父長的結婚・家族観は 65 歳以上の人々を中心に強くみられ、個人主義的・民主的な結婚・家族観をもつ戦後生まれの若い世代との間に価値観の葛藤を生じている。同時に男らしさ、女らしさというようなジェンダーアイデンティティに対する態度、性別役割分業に対する認識の相違にみられるような男女間の価値観の違いも根強く残り、様々な矛盾・葛藤を生み、登校拒否など様々な家族病理を生み出す原因となっているとしている。

日本と韓国は、共に儒教倫理に基づく家父長制社会の伝統をもち、家族は男性を中心に統合され、女性はその統率のもとで性別役割分業に基づいて多くの機能を担ってきた。日本では 1960 年以降、韓国でも 1970 年代以降急速な経済発展に伴う産業化・都市化の中で、急速な人口学的変化、家族形態や家族意識の変化を体験し、それに伴って伝統的家族存続の基礎が失われ、家族のあり方が変化した。このような変化が短期間のうちに急激に起こったために、伝統的価値と現代的価値とが混在し、様々な矛盾・葛藤が生じてい

るというのが現状である。今回の 2 つの報告は、このような両国に共通する社会的背景を前提としたもので、欧米諸国参加者には、アジア社会の伝統とその変化について認識を深めるよい機会となり、報告の後は盛んな討論が交わされた。

(国際長寿センター 工藤由貴子)

セッション 2 環境と家族

セッション 2 では 4 つの報告があった。

タンザニアの A. C. ルワンダ氏は「都市の家族へのインフォーマルセクターの役割」と題して、開発途上国では構造調整の下であえぐ貧しい人々が、都市に集中し、インフォーマルセクター（主として自営業）を形成し、不法占拠を行い、都市の美的機能を損ねている問題を報告した。インフォーマルセクターの多くは女性・青年であり、家族の生存を支える役割を果たしており、重要なことは、これらを排除するのではなく、いかにその役割を認め、発展させるかを考えるべきであると提起した。オーストラリアの P. K. ウィリアムズさんは教え子のザンビアからの留学生エスタ・マンデさんが自国の環境改善に取り組んだ事例を報告した。栄養失調による乳児の死亡率が高いザンビアでは、母親を対象とした指導がキーポイントであるにもかかわらず、従来そのアプローチが困難であった。エスタさんは現地に赴き、地元で調達できる食材から栄養の確保をはかったこと、また知識の伝達にイラストを多用する等、教材や指導方法の改良によって効果が上がったことを報告した。

日本の外山知徳氏は、現代日本の登校拒否児の事例調査を積み重ね、登校拒否が家庭内での母親の過剰な期待と父親の無関心という家庭教育の問題、理想的家族モデルの欠如、適切な使い方の訓練もなしに与えられる子ども部屋の拡大という居住空間の変化、友達不在の下で起こる問題であること、そして、住環境のテリトリー確立のための適切な教育が求められていることを提起した。

川崎衿子氏は明治以降の都市中流階層の家事労働空間の変遷を 5 つの時代区分に分け、報告した。明治時代の典型的住空間は襖、畳で構成され、フレキシブルではあるがプライバシーもなく、家族のためのケの空間は、暗く、狭いものであった。それが、今日では、家事労働空間は男女が共に担い、家庭の中心的な場所に位置するまでに発展したが、設備の過剰化、エネルギーの消費問題に直面していることを報告した。

以上の報告4本は、先進国と途上国における、家族・ジェンダー・環境問題の典型的な課題を明らかにすることになった。グローバルに「環境と女性」を考えるためには、南からの提起に、襟を正さねばなるまい。知的興奮に満ちた有意義な会議であった。

(京都府立大学 上野勝代)

セッション3 ジェンダー・エクイティ

「ジェンダー・エクイティ」と題したセッション3は、海外から2本、日本から2本の報告が用意され、2日間に分割してもたれた。

最初の報告は、ドイツのフルダ大学のDr. Hiltraud Schmidt-Waldherrによる「Equality and Difference—Gender Relations in Upheaval? (平等と格差：変動期におけるジェンダー関係は?)」である。氏はまず、社会の上部構造であるジェンダーは社会構造の物差しである、と位置づける。その上で、崩れてきている伝統的なジェンダー関係について、しかし再構築されているものもまたジェンダーに特定されて社会的不平等を生んでいるという実態について、ドイツの場合を中心に述べる。そしてジェンダー政策によるジェンダー関係の規制の必要性に言及する。

次の酒井はるみ氏(茨城大学)の報告「Last Names of a Married Couple—Women and Law in Japan (既婚女性の姓：女性と日本の法)」は夫婦同氏を強制している民法第750条が、いかにジェンダー・エクイティに反するものになっているかということを、氏が1993年に実施した調査結果等を使って明らかにした。

そして2日目には、オーストラリアのクィーンズランド大学のDr. Claus Jehneによる「An Uncomprehending Male's View of Gender Equity and Household Work in Australia (理解不足の男性から見たオーストラリアにおける性的差別と家事労働)」と、東京都立短期大学の竹美登利氏の「Gender Equality in Time Use (男女平等と生活時間)」の、2つの報告があった。

Claus氏は男性である。氏は、自国における戦後の家事労働や女性の社会的地位の変化と、それに関して男性の無理解な状況を分析する。そして21世紀には女性は社会的抑圧や男性の支配から逃れることができるだろうと展望し、「女性と男性が公正なパートナーシップの下に、両者の本来の可能性を最大限に発揮できるよう努力すること」が今の課題であると、締めくくる。

大竹氏は、男女平等度の測定に生活時間調査を活用

している国連の動向を紹介し、我が国でも男女平等の視点から、そしてジェンダー・エクイティの進展に寄与するような生活時間研究が一層進められる必要があることを提起した。

以上、いずれも、先進諸国におけるジェンダー関係をめぐる揺らぎや課題にアプローチしたものであった。
(横浜国立大学 鈴木敏子)

セッション4 教育とジェンダー

Amita Verma (India) は「Narrowing the Gender Gap: Education for Women's Equality in India」と題してインドに於ける女子の初等学校への登録数の僅少と不登校、ならびに早い段階での落ちこぼれの実態と政府による新しい教育政策の報告があり、僅か数年の初等教育を受けるだけでも、その後の女性の自立・発達、とくに子供の少数化とより良い育児環境の創世には役立っている現状を紹介すると同時に教育を通して女性の力が発揮できることを主張した。伊志嶺美津子(Japan)は「Education and Gender in Japan」と題して幼児期における男児と女児の精神的、行動科学的研究で男児と女児の積極性、消極性の差が周囲環境の影響の大きいことを指摘し、学校での名簿順位が男性女性の順で登録されていること自身を不平等と感じている女児もあり、Gender Equityの問題を考える隠されたメッセージの好例として紹介した。Maryanne Doherty-Poirier (Canada)は「Women and Education in Canada: Selected Highlights」と題して、国連のDevelopment ProgrammeのHuman Development Reportの6年目の年次報告においてカナダのHuman Development Indexが174カ国の中でも最高の評価を与えられているにも拘わらず、これを国別のGender Equityの程度で重みづけしたGender Development Indexではカナダは9位になっている理由を女性の教育における関与と関連づけ説明した。最後に、荒井紀子(Japan)は「Gender Equity and Home Economics Education in Japan」と題して、1994年から日本で始まった新しい高校カリキュラムで、家庭科が男子、女子生徒に必修科目になったが、これをGenderに焦点を当てて家政学の教育的側面を議論し、家庭科がGender EquityとGender Biasからの解放に関する意識を強化する科目として学校教科の中でも特異な、必要不可欠な特徴を持っていると主張した。

(昭和女子大学 中島利誠)

第18回国際家政学会プレコンgres

セッション5 平等、開発、平和

3つのプレゼンテーションと一括したディスカッションが行われた。まず最初にフィリピンのセシリア・フロレンシオ フィリピン大学教授より、社会における人間発達（ヒューマン・デベロップメント）をどのような指標で計っていけばよいのか、国際統計を利用しながら報告がなされた。女性が能力を伸ばす機会があるか、能力を発揮する機会はあるか、その能力は正当に評価されているか、この指標は教育、所得、寿命、生活水準などにくわえてジェンダー指標である。ジェンダー指標とは例えば大学の学部長や短期大学の学長に占める女性の割合を見るというようなもので困みに日本はこの指標では27番目の国である。全体的に見るとスウェーデンが1位である。次いでフィリピンの実情を他のアジア諸国との比較を交えて報告し、伝統的な女性の役割はさして変化していないものの、平等の推進と人間発達には成果があり家政学者は社会や家族についてのユニークな研究でこれに貢献できると結んだ。

つぎに伊藤セツ 昭和女子大学教授が日本の家政学者が国際的に開発、環境、貧困、消費者教育などについて関わってきた経過を説明し、アジアにおける開発とジェンダー問題研究のため新しい学問分野を開けるような研究協力システムを提案した。また日本政府に対して行ったジェンダー・エクイティ推進のための提案が紹介された。

最後にヌワケゴ・モロク アマドゥペロ大学教授が国連の差別撤廃条約以降、いろいろな施策がおこなわれたにもかかわらずナイジェリアの女性の地位が低いことについて報告した。小学校の女子の就学率は男子の78%であり、識字率も低く、女子の早婚、妻の隔離も社会文化として続いている。女性の労働は正当な経済的評価を得られていない。今後は男性の中にある養育者としての意識、女性を援助するネットワークの形成が必要であると結んだ。

討論では伊藤報告に対し、新しい学問分野の協力体制づくりには賛成であること、それには南アジアもぜひ含めてほしいとの提案がなされたが、実際の生活にはいろいろなレベルがあり、下のレベルまでどうやって変えていくのかという問題が大切という意見や、国際協力も大事だがもっと地元の問題も取り上げるべきだという意見が出された。

(市立名寄短期大学 津田美穂子)



写真3. 交流パーティー、世界12カ国からの参加者たち



写真4. 交流パーティーの様様

家政学会の新しい広がりー市民との交流パーティー

「国際家政学会プレコンgres世界の参加者との交流のつどい」と横断幕が掲げられた東松山市総合会館4階ホールにおいて、約150名の参加を得て、午後5時、交流パーティーがスタートした。主催は市民の学習グループ「緑風ネットワーク21」を核とした交流のつどい実行委員会と文部省女性の社会参加支援特別推進事業「彩の国誰にも住みよいまちづくりⅡ」東松山地域実行委員会との2つの市民組織である。

司会は権田 功、浅井妙子、伊達三保子（通訳）の3氏。主催者側の石川邦夫氏、島野正子氏、家政学会側の中島利誠国際交流委員長の挨拶、コーネル大学Firebaugh教授による乾杯の後、会食しながらの歓談の輪が広がった。料理は会場専属のレストランに一部依頼したが、巻すし、筑前煮、ミニ春巻、茄子の冷製、酢鰻頭など、市民の料理グループの手づくり料理が並

べられ、東松山名物のやきとりも提供された。どれもおいしく、外国人はもちろん日本人にも大好評であった。

アトラクションとして「津軽三味線同好会」の民謡、女声コーラス「コーロ MAI」による唱歌4曲が披露されたあと、岡本一春氏の司会で外国人参加者全員が舞台上に立って感想などを述べられた。最後に、地元恒例の「三三一」締めを行い、交流パーティは終了した。

これらはすべて市民が企画し、ボランティアの手で実行されたものである。会場で実行委員会を持ったが、「100点だった」との感想が多かった。反省すべき点はあったろうが、それぞれの役割を精一杯やり遂げた満足感と、おそらく自分では気づかない自分の力、久しく忘れていた仲間との共同作業に感激しての感慨だったと思う。学会と市民との交流に新しい道を拓いた「エンパワーメントパーティ」だったと評価したい。

(東京都立短期大学 石川尚子)

青葉風に一見学会—

国立婦人教育会館は、溪谷が嵐山に似ていると言われる槻川と都幾川の落合所所にあり、鎌倉時代の武将畠山重忠の居城だった所です。

ウェルカムパーティの乾杯で、「ここ比企は古代日置と書き、太陽を司るという意味があり、古くから人々の暮らしがありました。この館を鎌倉街道が通り、対岸の八幡社には、木曾義仲、産湯の清水があります…。私たちは関東武士の末裔」とお国自慢、通訳の方を苦労させてしまいました。

朝9時市役所のバスに乗り込みました。女性施策推進室長と担当課長にも同乗頂きました。

仲間の奥野君は、イラストレーター、傍ら歩け協会の仕事もされており、今回彼のプランを容れました。伝統工芸館は、和紙の里にあり、手漉きにチャレンジしました。ここの和紙は、古刹慈光寺の求めにより始まり、比叡山延暦寺創建の時、経典を送っているという話も聞きました。

大附の里では、そばの手打ちを体験し、自分で打ったそばを堪能しました。

人見識りしないB君「どうして外人の鼻高いの」「お父さん、お母さん、そのおじいちゃんも高いからよ」の会話を耳に、浄空院へ続く竹林を歩きました。若い方丈さんが座禅堂を案内してくれました。

丸木夫妻は、戦争の悲惨さを描き続け、位里さんは昨年ノーベル平和賞候補になりましたが、残念ながらお亡くなりになりました。

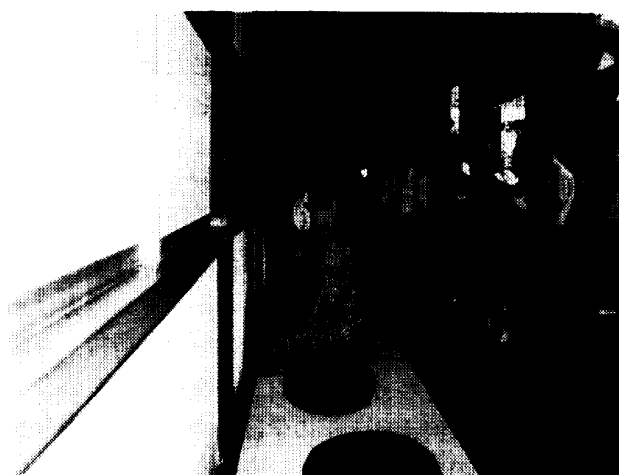


写真5. 見学会、浄空院にて座禅を組むインドの A. Verma 氏

館を出る頃、小雨が落ちて来ましたが、花をあしらった手漉きの和紙が届き、大喝采でした。

初蟬やそば打つ顔の和わらぎで

和の膳（とつくにびと）に外国人も青葉風 邦夫

(緑風ネットワーク 21 石川邦夫)

コンタクトパーソンとして

今回の企画は、福井大学の荒井紀子氏と私が1992年のドイツ、ハノーヴァー大会のプレ kongress に参加した経験に端を発しており、企画を担当したことから、「コンタクトパーソン」の役を仰せつかった。

ドイツのプレ kongress は、“Feminism and Home Economics”をテーマに、オスログループが主催して開かれた。このグループは、オスロで開催された1984年 IFHE 大会の時に家政学にジェンダー視点を導入する必要を強く感じていた人々が集まったことに端を発し、1988年の IFHE ミネアポリス大会での会合を経て、1992年のプレ kongress 開催を結実させた。このプレ kongress には、バディア IFHE 会長、ティーレヴィティッヒ次期会長（当時）をはじめとした著名な家政学者が参加し、その記録集である“*Youth, Family and Household*”は現在ヨーロッパの家政学の教科書として広く使われている。また、このプレ kongress で採択された決議を受けて、ハノーヴァーの本大会で“*Gender Equity on Home Economics Program*”が決議された。

今回の日本でのプレ kongress はこの流れを受け継ぐべく、前述の決議にヒントを受けてテーマを設定した。最初に企画を立てたのは2年前の1994年7月1

第18回国際家政学会プレコンgres

日であるから、すべてが不確実で暗中模索のなかでの遂行であった。また、それぞれの参加者がテーマによって報告し、議論するという形態の国際会議の経験も浅かったので、関係者には大きな不安を抱かせたと思う。企画の不十分さを他の実行委員のメンバーが補完し、最終的には同時通訳、立派な配布資料、緻密な事務・会計処理、地域の人たちによる刊行や歓迎・送別パーティなどが実施された。その結果内容も充実し、多くの参加者が満足してくれたようであった。討論の成果を決議文としてまとめられなかったことは残念であるが。

コンタクトパーソンは様々な問い合わせに応じることがその主要な役割だが、特に外国からの問い合わせへの対応は、一番気の使うところである。はじめのアクセスが家政学会事務局であったことは、混乱がなく良かった点である。最終的には40人からの問い合わせがあり、16人が参加した。国状や慣習の異なる人からの問い合わせで、学会や委員会の見解をうかがわないと返答できないものも多く、それぞれに判断が要求された。郵便（国際エクスプレス等）、電話、Fax、e-meilなどあらゆる情報伝達手段を使ったが、これは必需であった。

（都立短期大学 大竹美登利）

南京でのプレコンgres

"Home Economics Development and Networking with China"

中国における IFHE pre-congress workshop は1996年7月14日～17日、中国の南京師範大学金陵女子学院において開催され、私は国際交流委員会の命を受けてこのworkshopに参加したので概要を報告する。

1. 概要と参加者

このPre-Congress Workshopは、昨年の第4回世界女性会議の合間を縫って行われたIFHEと金陵女子学院との会合をきっかけとして、America, Florida大学のDr. Marian Davisと南京師範大学金陵女子学院（Ginling Women's College）長Huang Taoの連携で準備され、金陵女子学院のメンバーによって運営された。

テーマは"Home Economics Development and Networking with China"であり、現在の中国の激しい経



写真6. 南京でのプレコンgres風景

済変化に伴って生じている生活・家族・労働・女性の問題に対処し、新しい需要に対応するため、新しい家政学を築きつつある中国の<家政学>関係者の連絡ネットをつくること、中国の家政学関係者と国際家政学会が連携をとり発展していくことを旨としている。

参加者は6カ国46人（通訳等関係者を含めると60人位）であった。中国からは、主催の南京師範大学金陵女子学院長Huang Tao、同副院長であり江蘇省家政学会会長のMei Ruolan、同栄養食品専業主任で江蘇省家政学会副会長兼秘書長のGan Kechaoをはじめとして、各地域の大学関係者の他に、江蘇省婦女連合会主席、江蘇省哲学社会科学連合会副主席、武漢市社会科学院顧問、出版関係者、上海市の現代家政礼儀進修学校校長、作家等々、各界からの参加があり、地域も南京、北京、上海、杭州、福州、武漢、広州、成都等に及び、中国において新しい分野をつくっていくことへの関心の広さを伺わせた。中国以外からは国際家政学会会長のMaria Thiele-Wittig (Germany)、Gertraud Pichler (Austria)、Marian Davis (USA)、"Amerian Association of Family and Consumer Sciences"会長のPenny Ralston (USA)、Jill Camilleri (Marta)、Carolyn Jackson (USA)、日本からは筆者（天野）、中国からの研究生王 蕾であった。

2. 今回のworkshopの意義

今回のworkshopの意義は二つある。

第1には、中国において形成されつつある家政学（彼らはそれを新家政学と言った）がよりよく発展することを願って、全中国におけるネットワークがより効果的にできるように国際家政学会がきっかけをつく

ることである。きついスケジュールを縫うようにして中国の参加者たちは組織化について熱心に話しあっていた。

第2には、中国が国際家政学会に参加することの意義である。中国からの家政学情報が世界に向けて発信されるようになることは、新しい風を国際家政学会が受けることでもある。当然、ARAHE（アジア地域家政学会）にも新風を吹き込むだろう。

workshopの期間中に、Marian Davisらの発意で、このworkshopの後Bangkokにおいて開催される第18回国際家政学会にGan Kechaoが参加することが可能かどうかの打診がなされ、中国以外からの参加者による資金カンパがなされ、これは実現した。第18回IFHE大会は、IFHE歴史上初の中国からの参加者を迎えたのである。

3. Workshopの内容

次に、スケジュールを要約しておきたい。

7月14日は市内観光、受付、金陵女子学院の心尽くしのパーティがあり16日に半日の施設見学が組まれた他は、スピーチとグループ討議が繰り返された。スピーチのテーマは「変化する世界における家政学の実践の可能性」「家政学の基礎概念と社会への価値」「家政学の二つの応用」「教育による家政学の発展とひろがり」①小等・中等・より高いレベルにおける学校教育と職業教育、②学校以外の教育—女性とそれ以外のグループ・全中国婦女連合・TVと余暇時間大学・ウィークエンド学校「仕事・雇用とネットワーク」①労働市場と可能性のある労働者の教育、②Fujian地方における家政学専門職の労働市場「中国における家政研究と教育の発展についての現状」「ネットワーキング」「将来への戦略：中国のための連帯」であった。最後に、全体を「要約」し、このwork-shopの意義を確認し、Huang Tao, Maria Thiele-Wittigの挨拶で終わった。

これらのテーマはそれ自体、現在の中国の家政学に必要なとされ期待され、開かれつつある方向を示している。繰り返される活発なディスカッションの中で明らかにされていたように、現在の経済変化の中でのニーズ、資格取得、学校の制度的問題、他分野との関係調

整、政府関係者・大学の上層部への家政分野への理解を開いていくこと等、問題が山積している。家政学に関する情報は必ずしも多くはない。多くの研究蓄積してきた日本の家政学会や家政学者が貢献できる部分も多くあると思った。

4. <南京>と日本からの参加について

workshopの計画が遅れたためかその他の事情があったのか不明であるが、pre-congressのアナウンスメントにはこの南京におけるworkshopは掲載されていなかった。そのために、日本から出席したのは講演を依頼された筆者（と通訳）だけの参加になった。

中国・南京におけるworkshopへの参加は、私には緊張感の高い重い経験であった。いうまでもなく南京大虐殺の行われた場所であり、私は会議開始前に南京大虐殺遭難同胞記念館を見学していた。

私に与えられたテーマは「小・中・高・大学等学校教育によるHome Economicsの発展と広がり」で、明治以来の家庭科を含む家政教育の歴史とある部分に絞って内容比較することであった。年表・教科書内容の比較表、現在家政系大学の当面している学生数の減少問題等を資料として配布し、戦争の時代に家庭科教育ないし家政（学）教育が果たした戦争協力の役割、戦後の家庭科教育を含む家政学が、平和への希求と実践の立場から再出発したことの確認から始めた。私は「日本と中国の関係」において戦争とHome Economics教育を考えていたが、私のスピーチはドイツ・アメリカ・オーストリアからの参加者にもそれぞれに、この問題を問うことになったようだ。私が話しはじめたとき、中国人参加者の多い後方の席は静まり、最前列の欧米参加者の席はざわめいた。

結果的に、私は中国に多くの友人を得ることができたことを嬉しく思っている。東アジア文化を共有できる日本人の一人として、いささかでも家政学を通じて中国における家政学の歴史に関わり、より実質的な交流を開くことに寄与できれば幸いだと思う。中国人参加者との意思疎通に通訳として活躍してくださった王蕾さん、主催者、関係のかたがたに心から感謝する。

（昭和女子大短期大学部 天野寛子）